

いのである。

形成的評価は、学習の各段階で実施されるものであり、生徒の学習と、教師の指導が、効果的に行われているかどうかを確かめ、次の授業の効率を高めるよう軌道修正する資料となる。

単位の認定にあたって、この形成的評価を取り入れるには、計画的に日常の評価を記録しなければならない。この場合の評価項目は、目標と表裏一体をなすとともに、生徒の学習方法や態度も記録することが望ましい。

形成的な評価計画が具体的に樹立されれば、総合的評価も、おのづから好ましい成果をみせるようになり、生徒も自己の学習に正しい認識をもち、教師に対する信頼感も高まるであろう。

(4) 研 修

いかに施設設備を充実し、教育内容を科学的、合理的に編成しても、教育は、結局のところ、人間が人間を相手に営む仕事であり、その効率を考えると、教師の質が最も重要な要素となる。

現在の高校教師たちが、すべてすぐれた教育者であるということができれば、素晴らしいことであるが、他の人間活動の分野の場合と同じように、個人的にさまざまな差があるのは当然のことである。

教師にとって重要なことは、どんな資質能力をもっていても、自己の専門分野について、また、指導技術について、たえざる研修を深めることであり、同時に、日々の教育実践をきびしく自己評価する謙虚さをもつことである。

① 生がい教育

高度に発達した技術社会では、生がいを通して学習を継続することが必要とされ、すでに世界の各国で、諸教育機関が成人に対して開放され、研修の場を提供している。

このような生がい教育が、最も必要とされるのは、教師自身であろう。青年たちに、新しい未来社会に適応して生きる道を教えるのに、教師の側

に、過去に対するすどい洞察とともに、未来への見通しかなければ、成果をあげることはできないであろう。

従来、多くの高校教師が、専門教科に閉じこもり、数年にわたる授業の後に、同じ教材を、同じ方法でくり返すだけの単調な授業となり、生徒をひきつける、先見性やざん新さを失い、生徒と教師の間に、有機的な人間関係が生れないのはざんねんなことである。教師自身に学ぶ姿勢がなければ、生徒に学ぶことの重要性をいくら力説しても、空しさが残るだけである。

② 生徒理解

教師にとって、生徒を理解することが重要であることは、自明のこのように思われているが、高校生に関する諸調査によれば、教師を相談相手として選ぶ高校生の割合は、決して高いものではない。これは、教師と生徒の間に、相談し話し合えるふんい気がないことを示しているし、観念的には成立している生徒理解が、実際には、指導のうえに生きていないことを立証している。

人を理解するのはむずかしいことであり、ときには、不可能といってもよいであろうが、教師と生徒の間では、教師の側から、生徒を理解しようとする忍耐強い働きかけがなければ、効果的な授業の成立は望めない。

生徒理解は、きびしい努力を必要とする。なぜなら、生徒からみれば、教師は人間であること以外には、まったく異質の外部的存在であり、かれらが、積極的に接近し、理解することなど必要としない人間集団なのである。

教師が生徒の尊敬のうえに立ち、たがいに信頼感で結ばれているというのは、小数のエリートが自己修練の場として学校を選んだ19世紀 発想であろう。

義務教育化した高校の教師たちが、生徒たちとの間に横たわる、知的な、あるいはまた、情的なギャップをうずめるには、生徒の生活の場にはい